

No.58 箕原 真 「人の球による空間ゲート」

Shin Minohara

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 4 月 1 日付 立川市市報記事より

箕原真さんは2か所で、動く車止め「人の球による空間ゲート」をつくった。広域防災基地が近くにあるため、ファーレ立川の歩行者専用道路は、緊急車両が通れるように車止めが動かさなくてはならないからだ。

車止めの形と歩道にサンドブラストで描かれた形が球体を連想させ、それが、車道から歩道へと対象を濾過する見えない皮膜となっている。具体的な物体としての車止めと車止めとの間の空間全体をも「車止め」にしてしまったのだ。

箕原さんは建築家で、この作品を球空間による「空間モデル」と呼んでいるが、それはまさに最小限の要素による空間の構築である。車中心の都市の機構を人間中心のものへと変えていく契機となるような車止めが登場したのだ。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

・ 国境や城壁の意味が薄れ、均質な世の中へと溶け込んでいく中で、逆に、都市に潜在する人々の間の、しきたり・社会機構の網の目が空間性を作り出す。

ここでは車の空間性から人の空間性へスケール感を変化させる半透膜のような「場」を考えた。それは、体内の動脈・静脈が活動するとき、分子の大きさによって選別透過するようなもので、それによって都市の組織を顕在化する。

・ 目に見えない原子・分子をモデル化することで、様々な反応の具体的なイメージが喚起、直観されるように、これは人の固有範囲として知覚体験される“球空間”による「空間のモデル」ともいべきもの。

・ 物と物との間の「空間」に意味性を持たせる事で、場の力がそこだけで終わらずに周辺へと広がっていくものを作ろうとした。

・ 「機能自身」の意味性を深め思想化することによって、理念を背景にしていながら、「それ自身」が具体的な事実の結晶になることを求めた。なぜなら、そのことによって「内容」が空虚にならず、記号だけでないものを含めることができると思うからだ。